Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-19

子どもの習い事と母親の育児不安および育児幸福感の関連 ： 母親の就労状態に着目して

谷，芳恵
齊藤，誠一
宮竹，優

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,13(1):31-36

(Issue Date)
2019-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041905

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041905

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第13巻第1号　2019

研究論文

子どもの習い事と母親の育児不安および育児幸福感の関連：母親の就労状態に着目して

Relationship between Children's Extracurricular Activities and Mother's Childcare Anxiety and Happiness: Focusing on the Mother's Employment Status

谷　芳恵*　　齊藤　誠一**　　宮竹　優***
Yoshie TANI*　Seiichi SAITO**　Yuu MIYATAKE**

要約：幼稚園に通う3～6歳の子どもをもつ母親222名を対象に，子どもの習い事について調査を行い，習い事の状況，習い事を通じての子どもの成長感，負担感と，母親の育児不安，育児幸福感の関連について検討を行った。その結果，8割超の子どもが習い事をしており，そのうち6割近い子どもが複数の種類の習い事を掛け持ちしていた。掛け持ちをしている子どもの母親は，掛け持ちをしていない子どもの母親に比べて習い事を通じて子どもの成長をより感じていた。母親の就労状態別に子どもの成長感，負担感と育児不安，育児幸福感の関連を検討した結果，専業母親は習い事によって子どもの成長を感じているほど育児の負担・不安，疲労感・気力低下が低く，子どもの成長，希望と生きがい，出産や子育ての意義について幸福感が高かった。また，習い事による負担感が高いほど子どもの成長について幸福感が高かった。これに対して有職母親は子どもの成長感と育児不安，育児幸福感に有意な関連はみられず，習い事の負担感が高いほど育児の負担・不安，疲労感・気力低下が高く，希望と生きがい，子どもに必要とされることは低かった。以上の結果から，母親の就労状態によって子どもの習い事のいずれの側面が育児不安，育児幸福感に影響を与えるかは異なることが示唆された。

キーワード：習い事，母親の就労状態，子どもの成長感，母親の負担感，育児不安，育児幸福感

1．問題と目的

習い事とは，学校園において実施される活動を除く，何らかの教育効果を期待して継続的に行われる活動である。近年，習い事の内容，方法は多様化し，大衆化しているとされる（伊藤・鳥原，2000）。ベネッセ教育総合研究所（2016）の調査によると，習い事をしている4～6歳の幼児は，2000年には63.8%，2015年には67.3%と，ほぼ横ばいではあるが，高い比率を維持している。2015年についてみると，幼稚園児では73.0%，保育園児では56.7%と，特に幼稚園に通う幼児で習い事をしている比率が高いことがわかる。このように，習い事は特別なものではなく，多くの子どもにとっては生活の一部として根付いた活動であることがうかがえる。

子どもが習い事を始めるきっかけについてみると，小学生では本人が希望して始めることが多いのに対し，幼児では親の意向によって始めることが多い（ベネッセ教育総合研究所，2009）。具体的には，親が子どもに習い事を始めさせる理由として「体力をつける」「友達作り」「集中力を高める」こと等が挙げられており（中山・栗原・森，2005），子どもの成長に対する親の期待が，子どもの習い事の普及の背景にあると考えられる。また，習い事をしてよかったこととしては，「できなかったことができるようになった」「体が丈夫になった」こと等が挙げられており（伊藤・鳥原，2000），親にとって習い事は子どもの成長を実感する機会を提供するものであるといえる。

ところで，清水・伊勢（2006）は，親が育児中に感じる肯定的な情動を育児幸福感と呼び，母親が育児幸福感を覚える要因として「子どもの成長・発達・健康」があることを示している。加えて，「子どもがよく育っている」ことを自分の育児方法や努力の結果として捉えることが重要であると指摘している。この観点からみると，子どもに習い事を与え，その習い事を通じて子どもの成長を感じることから，習い事は子どもを介して親に高い育児幸福感を与えるものと考えることができる。

その一方で，親が子どもに習い事をさせる背景として，親の育児に対するネガティブ感情が存在することも指摘されている。例えば片桐（2013）は，昨今の母親は不透明かつ不確実な将来に対して不安を抱えており，際限ない家庭教育の責任を負い，何をどこまでやればいいのかがわからないまま習い事やゲームなどの商業主義に翻弄されているとしている。また原田（1993）は，子どもに「早く早く」と焦り，「きちんとした完成品」を期待するあまりに育児に対する不安を抱き，その不安を解消するために子どもに熱心な教育を施そうとする母親が存在するとしている。これに関連して，牧野（1982）は，育児不安を「子どもの現状や将来，あるいは育児へのやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」であり，「持続し，蓄積された不安の状態」であるとしている。片桐（2013）

*　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究員
**　神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授
***　新学社

（2019年4月1日　受付
2019年6月12日　受理）

や原田（1993）が指摘したように，子どもに習い事させようとする母親の不安に，こうした育児不安があるものと考えられる。

しかしながら，母親の育児不安と習い事の関連には，必ずしも一貫した見方がある訳ではない。例えば，ひとつには育児不安を緩和する要因として，子育ての専門家によるサポートや，育児仲間の存在，自分の不満を話すことのできる環境・ネットワークの存在が重要であること（例えば，加藤・小林 , 2001; 手島・原口 , 2003; 渡辺・石井 , 2005）から，子どもの習い事は，習い事の指導者や他の母親と交流する機会を母親に提供すると考えられ，これにより育児不安を低めることが期待されるという見方がある。また，いまひとつには，荒牧・無藤（2008）が指摘しているように，育児に関する情報を多く得ている母親ほど子どもの育て方や育ち方に対する不安が高く，こうした情報に振り回されて育児不安が助長され，その不安を解消するためにまた情報収集に走るという負の循環が生じていることから，子どもの習い事を通じて指導者や他の母親から育児についての情報を得ることが，かえって母親の育児不安を高めるとする見方である。このように，子どもの習い事が母親の育児不安に与える影響については，正負いずれもの可能性が考えられるが，習い事と育児不安の関連を直接検討した研究はほとんどなく，その影響は明らかではない。

さらに，子どもが習い事を続ける上で，少なからず親の負担もあり，この観点からも検討する必要がある。すなわち，幼児期の習い事には経済的な負担の他，習い事への送迎や付き添い，宿題の指導といった時間的負担（片桐，2013）を伴い，とりわけ就労している母親（以下，有職母親）である場合には，仕事との兼ね合いをはかる必要があり，就労していない母親（以下，専業母親）に比べ，より負担感が大きいものと考えられる。このような負担は，母親を身体的・精神的に疲弊させ，育児に対してネガティブな影響を与えることが予測される。

以上のことから本研究では，幼稚園に通う子どもの習い事を取り上げ，子どもの習い事を通じて母親が抱く子どもの成長感，ならびに負担感について検討を行う。また，これらの習い事による成長感，負担感と，母親の育児不安，育児幸福感との関連について，母親の就労状態をふまえて検討を行い，子どもの習い事が母親に与える影響について明らかにすることを目的とする。

なお本研究では，習い事をスイミングや体操教室等の「スポーツ系」習い事，ピアノ，絵画，バレエ，ダンス等の「芸術・音楽系」習い事，学習塾や通信教育等の「学習系」習い事，これらに該当しない「その他」習い事，の4種類に分けて検討することとする。

2．方法

A県内の私立幼稚園3園を通じて質問紙と返信用封筒の入った封筒を各家庭に配布し，配布後2週間以内に郵送にて返信するよう依頼した。なお，倫理的配慮として，まず協力を得た幼稚園に対して本調査の目的と内容について了解を得，質問紙には回答にあたってプライバシーは保護されること，回答を拒否する権利があること，回答を拒否することによって不利益を被ることはないことを明記し，回答をもって協力の同意を得られたものと判断した。

調査協力者

A県内の私立幼稚園3園に通う子どもを持つ母親650名に質問紙調査を依頼し，252名から回答を得た（回収率38.8%）。このうち，欠損データがなかった222名を分析対象とした。分析対象者のうち，子どもが習い事をしていると回答した母親は191名（86.0%），習い事をしていないと回答した母親は31名（14.0%）であった。分析対象者の基礎統計量は，表1のとおりであった。

調査内容

回答にあたって，協力者には，自身の3～6歳の子ども（複数いる場合については，最も年長の子ども1名）について回答するよう求めた。

1) フェイス項目　母親の年齢および就労形態，子どもの人数，年齢，および性別
2) 習い事に関する項目　習い事の有無，種類（スポーツ系，芸術・音楽系，学習系，その他），受験目的の有無
3) 子どもの楽しみ度　子どもが習い事をどの程度楽しんでいると感じるかを5件法（1: 全く楽しんでいない～5: 非常に楽しんでいる）でたずねた。
4) 子どもの成長感　子どもが習い事を通じて成長したと感じることがあるかを5件法（1: 全くない～5: よくある）でたずねた。また，「4: 時々ある」「5: よくある」と回答した人には，成長の内容を自由記述で回答するよう求めた（複数回答可）。
5) 母親の負担感　子どもの習い事を負担に感じることがあるかを5件法（1: 全くない～5: よくある）でたずねた。また，「4: 時々ある」「5: よくある」と回答した人には，負担の内容を自由記述で回答するよう求めた（複数回答可）。
6) 育児不安　牧野（1982）の育児不安尺度を使用した。「一般的疲労感」「一般的気力の低下」「イライラの状態」「育児不安徴候」「育児意欲の低下」の計14項目について，4件法（1: まったくない～4: よくある）でたずねた。使用に際しては，一部記述を変更した。
7) 育児幸福感　清水・関水・遠藤・落合（2007）の育児幸福感尺度を使用した。「子どもの成長」「希望と生きがい」「親としての成長」「子どもに必要とされること」「新たな人間関係」「子ども

表1　分析対象者の基礎統計量（N = 222）

		習いごとを			
		している		していない	
		n	（ % ）	n	（ % ）
年齢	30歳未満	7	（ 3.7 ）	0	（ .0 ）
	30歳以上 35歳未満	28	（ 14.7 ）	6	（ 19.4 ）
	35歳以上 40歳未満	81	（ 42.4 ）	14	（ 45.2 ）
	40歳以上 45歳未満	63	（ 33.0 ）	11	（ 35.5 ）
	45歳以上 50歳未満	12	（ 6.3 ）	0	（ .0 ）
就労形態	専業	147	（ 77.0 ）	27	（ 87.1 ）
	パートタイム	29	（ 15.2 ）	3	（ 9.7 ）
	フルタイム	5	（ 2.6 ）	0	（ .0 ）
	自営業	6	（ 3.1 ）	0	（ .0 ）
	その他	4	（ 2.1 ）	1	（ 3.2 ）
子どもの人数	1人	41	（ 21.5 ）	2	（ 6.5 ）
	2人	112	（ 58.6 ）	18	（ 58.1 ）
	3人	37	（ 19.4 ）	8	（ 25.8 ）
	4人	0	（ .0 ）	3	（ 9.7 ）
	5人	1	（ .5 ）	0	（ .0 ）
	合計	191	（ 86.0 ）	31	（ 14.0 ）

からの感謝と癒し」「出産や子育ての意義」の7因子（計35項目）について，5件法（1: あてはまらない～5: あてはまる）でたずねた。これらの項目の使用に際しては，一部記述を変更した。また，因子「夫への感謝の念」と項目「どんなに叱ってもお母さん大好きと1日に何度も言ってくれ，子育てしていて唯一安心する」については，解釈の難しさや平均値の低さが指摘されている（澤田・明野・吉森・工藤，2009）ことから，本研究では検討から除外した。

調査時期

2013年12月。

分析方法

以上のデータを用いて，まず母親の就労状態（専業，有職）と習い事の掛け持ち状況（習い事を1種類のみしている，2種類以上している）のクロス集計表のχ^2検定を行った。次に，習い事の掛け持ち状況による子どもの成長感と母親の負担感の比較を，母親の就労状態による子どもの成長感，母親の負担感，ならびに母親の育児不安，育児幸福感の比較を，t検定により行った。また，子どもの習い事状況（習い事をしていない，1種類のみしている，2種類以上している）による育児不安，育児幸福感の比較をクラスカル・ウォリス検定により行った。さらに子どもの成長感，母親の負担感と母親の育児不安，育児幸福感の相関係数を算出した。以上の分析においては，統計ソフトIBM SPSS Statistics 23を使用した。

3．結果と考察

(1) 習い事（表2）

習い事をしている子どものうち，スポーツ系，芸術・音楽系，学習系のうち，いずれか1種類の習い事をしていると回答したのは82名(42.9%)，2種類の習い事をしていると回答したのは70名(36.6%)，3種類の習い事をしていると回答したのは35名(18.3%)，4種類すべての習い事をしていると回答したのは4名(2.1%)であった。なお，その他の習い事の内容としては，「料理」「囲碁」等が挙げられた。このことから，少なくとも6割近くの子どもが何らかの習い事を掛け持ちしていることが示された。小学校受験のための習い事をしていると回答したのは10名（5.2%）であった。このうち全員が学習系の習い事をしており，1名を除いて他の種類の習い事もしていた。

母親の就労状態別にみると，専業母親の場合，習い事1種類は60名（40.8%），2種類は54名（36.7%），3種類は29名（19.7%），4種類は4名（2.7%）であった。これに対して有職母親の場合，1種類は22名(50.0%)，2種類は16名(36.4%)，3種類は6名(13.6%)，4種類は0名（0.0%）であった。母親の就労状態に関わらず，最も多かったのが学習系（専業母親73.5%，有職母親61.4%）であり，専業母親ではスポーツ系（61.9%），芸術・音楽系（44.2%），有職母親では芸術・音楽系（54.6%），スポーツ系（47.7%）であった。また，小学校受験のための習い事をしていると回答したのは，専業母親では6名（4.1%），有職母親では4名（9.1%）であった。

複数の種類の習い事をしているか否かについて，母親の就労状態による違いを検討するためにχ^2検定を行った。その結果，有意差は認められなかった（$\chi^2(1) = 1.17$, *n.s.*）。このことから，母親が専業母親であるか有職母親であるかで，子どもの習い事の数に差があるとはいえなかった。

表2　母親の就労状態別にみた子どもの習い事の種類と内訳

習い事の種類	専業母親 n（%）	有職母親 n（%）
1種類		
スポーツ	20（13.6）	8（18.2）
芸術・音楽	7（4.8）	6（13.6）
学習	32（21.8）	8（18.2）
その他	1（.7）	0（.0）
2種類		
スポーツ／芸術・音楽	10（6.8）	3（6.8）
スポーツ／学習	28（19.0）	4（9.1）
芸術・音楽／学習	15（10.2）	9（20.5）
芸術・音楽／その他	1（.7）	0（.0）
3種類		
スポーツ／学習／その他	1（.7）	0（.0）
スポーツ／芸術・音楽／学習	28（19.0）	6（13.6）
4種類		
スポーツ／芸術・音楽／学習／その他	4（2.7）	0（.0）
合計	147	44

(2) 習い事に対する子どもの楽しみ度

習い事に対する子どもの楽しみ度を習い事の種類ごとにみると，子どもが「非常に楽しんでいる」「楽しんでいる」と回答した割合はそれぞれスポーツ系94.7%，芸術・音楽系95.5%，学習系89.0%であり，いずれも子どもの楽しみ度は高かった。

(3) 習い事による子どもの成長感と母親の負担感

習い事を通じての子どもの成長感については，子どもの成長を感じることが「よくある」「時々ある」と回答したのは177名（92.6%）であった。成長を感じる内容としては，能力や技術の獲得・向上に関する「能力・技術の向上」（82名，46.3%），課題に諦めずに取り組んだり努力したりする姿勢の獲得に関する「努力・忍耐力の体得」（60名，33.9%），社会生活を送る上での能力の獲得に関する「社会性の発達」（36名，20.3%），積極性の向上等，性格に関する「性格の変化」（25名，14.1%），「その他」（50名，28.2%）が挙げられた。

母親の負担感については，子どもの習い事に対して負担を感じることが「よくある」「時々ある」と回答したのは85名（44.7%），「あまりない」「全くない」と回答したのは72名（37.7%）であった。負担を感じる内容としては，習い事の送迎に関する「送迎の負担」（62名，72.9%），習い事に付き添う時間の確保や日程調整に関する「時間的拘束の負担」（40名，47.1%），習い事によって生じる子どもへのいらだちや，他の兄弟への影響等，家族関係へのネガティブな影響に関する「家族・親子関係への負担」（23名，27.1%），習い事による経済面への影響に関する「経済面の負担」（19名，22.4%），「その他の負担」（15名，17.6%）が挙げられた。

次に，母親の就労状態別にみた子どもの成長感と母親の負担感を，図1に示した。これをみると，母親の就労状態によって大きな傾向の違いはみられなかった。これについて，就労状態による子どもの成長感と母親の負担感の差を検討するためにt検定を行った。その結果，成長感（$t(189) = .37$, *n.s.*，専業母親$M = 4.43$，$SD = .66$／有職母親$M = 4.39$，$SD = .65$），負担感（$t(189) = .47$, *n.s.*，専業

母親 M = 3.00, SD = 1.12 ／有職母親 M = 2.91, SD = 1.20）ともに，有意差は認められず，習い事を通じての子どもの成長感と負担感については，専業母親と有職母親とで差があるとはいえなかった。

さらに，複数の種類の習い事を掛け持ちしているか否かによる子どもの成長感，母親の負担感の差を検討するために t 検定を行った。その結果，成長感（$t(189)$ = 3.02, p < .01，掛け持ち無 M = 4.26, SD = .64 ／掛け持ち有 M = 4.54，SD = .65）では有意差がみられ，複数の種類の習い事を掛け持ちしている方がより子どもの成長を感じていた。負担感（$t(189)$ = 1.59, *n.s.*，掛け持ち無 M = 2.83，SD = 1.14 ／掛け持ち有 M = 3.09，SD = 1.12）については，有意差は認められなかった。

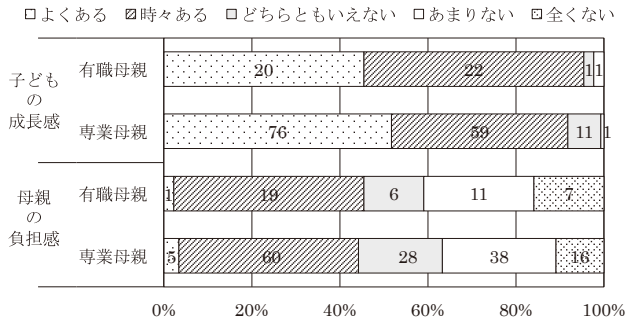

図 1　母親の就労状態別にみた子どもの成長感，母親の負担感の度数分布

表 3　育児不安尺度の因子分析結果（主因子法，promax 回転）

	F1	F2
育児の負担・不安		
1 子どものことで，どうしたら良いか分からなくなることがある	.76	-.15
2 子どもがわずらわしくて，イライラしてしまう	.66	.02
3 毎日毎日，同じことの繰り返ししかしていないと思う	.62	-.02
4 自分は子どもをうまく育てていると思う(*)	.56	-.03
5 子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う	.41	.28
6 育児によって自分が成長していると感じられる(*)	.40	.09
疲労感・気力低下		
7 生活の中にゆとりを感じる(*)	-.02	.69
8 毎日はりつめた緊張感がある	-.06	.65
9 毎日くたくたに疲れる	-.04	.62
10 朝，目覚めがさわやかである(*)	-.04	.59
11 考えごとがおっくうで嫌になる	.35	.44
※ 削除項目		
・ 自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう		
・ 子どもは結構一人で育っていくものだと思う		
・ 子どもをおいて外出するのは，心配で仕方がない		
因子間相関	.65	
累積寄与率	38.06	

(*)は逆転項目

(4) 母親の育児不安尺度，育児幸福感尺度の信頼性および因子分析

育児不安尺度，育児幸福感尺度の各下位因子について，信頼性を確認するため Cronbach の信頼性係数を算出した。その結果，育児不安尺度については，「一般的疲労感」（α =.47），「一般的気力の低下」（α =.54），「イライラの状態」（α =.41），「育児不安徴候」（α =.35），「育児意欲の低下」（α =.65）と，複数の因子で低い値となり，十分な内的整合性が確認されなかった。そのため新たに因子分析（主因子法，promax 回転）を行い，因子負荷量が低かった 3 項目を削除し，2 因子構造を採用した（表 3）。第一因子については，育児や子どもに関するネガティブな感情についての項目等から構成されていることから，「育児の負担･不安」と命名した。第二因子は，生活の中の疲労感や気力の低下に関する項目から構成されていることから，「疲労感・気力低下」と命名した。それぞれについて信頼性係数を算出したところ，「育児の負担･不安」（α =.76），「疲労感･気力低下」（α =.76）であり，十分な信頼性が得られたと判断した。

育児幸福感各下位因子については，信頼性係数はそれぞれ「子どもの成長」（α =.74），「希望と生きがい」（α =.85），「親としての成長」（α =.85），「子どもに必要とされること」（α =.72），「新たな人間関係」（α =.75），「子どもからの感謝と癒し」（α =.69），「出産や子育ての意義」（α =.77）であった。そのため，十分な内的整合性が確認されたものと判断し，既存の因子構造のまま分析を行うこととした。

(5) 習い事の状況別にみた育児不安，育児幸福感

育児不安，育児幸福感各因子の平均値（SD）を，子どもの習い事の状況（習い事をしていない，1 種類のみしている，2 種類以上している）ごとに表 4 に示した。各群間における育児不安，育児幸福感の差を検討するため，クラスカル・ウォリスの検定を行った結果，いずれも有意差は認められなかった。このことから，子どもが習い事をしているか否か，1 種類か複数の習い事をしているかによって，母親の育児不安と育児幸福感に差があるとはいえなかった。

(6) 母親の就労状態別にみた育児不安，育児幸福感

子どもが習い事をしている母親について，育児不安，育児幸福感各因子の平均値（SD）を，母親の就労状態別に表 5 に示した。両群間における育児不安，育児幸福感の差を検討するため t 検定を行った結果，専業母親は有職母親に比べて「育児の負担・不安」（$t(189)$ = 3.28, p < .01）が有意に高く，「親としての成長」（$t(189)$ = 1.81, p < .10），「出産や子育ての意義」（$t(189)$ = 1.73, p < .10）が有意に低い傾向がみられた。このことから，習い事をしている子どもの母親では，専業母親の方が育児に対する負担や不安を感じて

表 4　子どもの習い事状況別にみた育児不安および育児幸福感の平均値（SD）

	習い事をしていない	習い事をしている 1種類	習い事をしている 2種類以上
	(n = 31)	(n = 82)	(n = 109)
	M （SD）	M （SD）	M （SD）
育児不安			
育児の負担・不安	2.40 （.64）	2.37 （.46）	2.28 （.50）
疲労感・気力低下	2.38 （.64）	2.47 （.53）	2.42 （.53）
育児幸福感			
子どもの成長	4.92 （.18）	4.85 （.28）	4.91 （.19）
希望と生きがい	4.56 （.48）	4.52 （.55）	4.58 （.49）
親としての成長	4.55 （.45）	4.46 （.54）	4.46 （.64）
子どもに必要とされること	4.35 （.64）	4.34 （.65）	4.30 （.63）
新たな人間関係	4.56 （.50）	4.51 （.54）	4.40 （.65）
子どもからの感謝や癒し	4.83 （.35）	4.78 （.40）	4.73 （.42）
出産や子育ての意義	4.53 （.62）	4.55 （.57）	4.54 （.60）

表5　母親の就労状態別にみた育児不安および育児幸福感の平均値（*SD*）とその比較結果

	専業母親（$n = 147$）			有職母親（$n = 44$）	
	M	（*SD*）		*M*	（*SD*）
育児不安					
育児の負担・不安	2.38	（.47）	**	2.11	（.46）
疲労感・気力低下	2.47	（.53）		2.33	（.53）
育児幸福感					
子どもの成長	4.89	（.24）		4.88	（.22）
希望と生きがい	4.55	（.50）		4.57	（.57）
親としての成長	4.42	（.61）	†	4.60	（.53）
子どもに必要とされること	4.30	（.62）		4.37	（.69）
新たな人間関係	4.45	（.60）		4.44	（.63）
子どもからの感謝や癒し	4.75	（.42）		4.77	（.39）
出産や子育ての意義	4.50	（.60）	†	4.67	（.53）

$^{**}p<.01$, $^{\dagger}p<.10$

表6　母親の就労状態別にみた子どもの成長感および母親の負担感と，育児不安，育児幸福感との相関

	子どもの成長感		母親の負担感	
	専業	有職	専業	有職
母親の負担感	.06	-.19		
育児不安				
育児の負担・不安	-.30 ***	-.08	.08	.40 **
疲労感・気力低下	-.24 **	-.11	.15 †	.45 **
育児幸福感				
子どもの成長	.21 *	.01	.21 *	-.23
希望と生きがい	.27 **	.06	.00	-.33 *
親としての成長	.19 *	.18	.01	-.23
子どもに必要とされること	.12	-.08	.00	-.27 †
新たな人間関係	.16 *	.15	.01	-.14
子どもからの感謝や癒し	.13	.11	.19 *	-.23
出産や子育ての意義	.23 **	-.13	-.01	-.21

$^{***}p<.001$, $^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$, $^{\dagger}p<.10$

いる一方で，子育てを通じて親としての成長を感じにくく，子育ての意義を感じにくい傾向にあるといえる。

(7) 子どもの成長感および母親の負担感と母親の育児不安，育児幸福感との関連

習い事をしている子どもの母親について，習い事を通じての子どもの成長感，母親の負担感と育児不安，育児幸福感との相関係数を，母親の就労状態別に表6に示した。これによると.20の非常に弱い相関も散見されるが，.20未満の場合は，ほとんど相関はないとされることから，今回は.20以上であった数値についてのみ検討を行う。

まず，子どもの成長感と母親の負担感については，母親の就労状態に関わらず，有意な関連は認められなかった。次に子どもの成長感についてみると，母親が専業母親である場合，「育児の負担・不安」「疲労感・気力低下」と有意な負の相関が，「子どもの成長」「希望と生きがい」「出産や子育ての意義」と有意な正の相関が認められた。この結果から専業母親は，習い事を通じて子どもの成長を感じているほど育児に対して不安を感じていないといえる。また，普段の生活の中でも疲労感や気力の低下を感じておらず，子どもの成長に喜びと生きがいを感じているといえる。これに対して有職母親の場合，育児不安と育児幸福感のいずれとも有意な相関は認められず，習い事を通じて子どもの成長を感じることは育児に対する不安や幸福感の感じやすさに関連するとはいえなかった。

母親の負担感についてみると，母親が専業母親である場合，「子どもの成長」に有意な正の相関が認められた。このことから専業母親は，子どもの習い事を負担に感じているほど子どもの成長から幸福を感じているといえる。これに対して有職母親の場合，「育児の負担・不安」「疲労感・気力低下」と有意な正の相関が，「希望と生きがい」と有意な負の相関が，「子どもに必要とされること」とは負の有意傾向がみられた。このことから有職母親は，子どもの習い事に負担を感じているほど育児を負担に感じ，また日常的には疲労感と気力の低下を感じ，子どもから生きがいを感じたり子どもに必要とされたりすることに喜びを感じたりはしていないといえた。

4．総合考察

本研究では，幼稚園に通う母親を対象に調査を行い，子どもの習い事について検討を行った。その結果，有効回答が得られたうちの8割超の子どもが習い事をしており，さらにその6割程度の子どもが複数の種類の習い事を掛け持ちしていることがわかった。習い事の掛け持ちは母親の大きな負担になると予想されたが，本研究の結果からは掛け持ちの有無によって負担感に差がないことが示され，反対に掛け持ちが子どもの成長をより感じる機会の提供につながっていることが示唆された。ただし，本研究では習い事の数ではなく種類についてたずねたため，この結果は正確に習い事の掛け持ちの有無を反映したものであるとはいえない。例えば，サッカーと水泳という異なるスポーツ系の習い事を複数しているケースなどは今回の結果には反映されていない。これは同時に，習い事を掛け持ちしている子どもの数が6割よりもさらに多いことを示唆している。実際の習い事の掛け持ち数を検討することで，習い事が母親の負担感に与える影響をさらに正確に把握することが必要であろう。

次に，習い事の有無や掛け持ち状況については，母親の育児不安と育児幸福感に差があるとはいえなかった。育児不安が高い母親はその不安を解消しようと育児に関する情報収集に走る（荒牧・無藤，2008）と指摘されていることから，習い事への取り組みと育児不安に関連があると予想されたが，今回の結果からはそのような関連はあるとはいえなかった。

有職か専業かという母親の就労状態による育児不安と育児幸福感の差については，有職母親よりも専業母親の方が育児不安を感じやすく，育児幸福感を感じにくいことが示唆された。しかし，有意差がみられたのは一部の因子に限られ，また有意傾向に留まる等，大きな差があるとはいえなかった。

母親の就労状態に関して興味深かったのが，習い事による子どもの成長感，母親の負担感と，育児不安，育児幸福感の関連についてである。専業母親が習い事を通じて子どもの成長を感じるほど育児に対する不安が低く，幸福を感じているのに対し，有職母親は子どもの習い事に対して負担に感じているほど育児に対する不安が高く，幸福を感じていないという結果であった。これは，母親の就労

状態によって，子どもの成長や母親にかかる負担といった習い事のいずれの側面が育児不安，育児幸福感に関連するのかに違いがあることを示している。このような結果がみられた理由として，有職母親にとって習い事によって時間的・身体的に拘束されることは，育児と仕事の両立に大きく影響し，そのネガティブな側面に着目せざるをえないためであると考えられる。これに対して専業母親は，有職母親に比べて時間的余裕が持ちやすく，子どもの成長という習い事のポジティブな側面により意識を向けやすかったと考えられる。また，専業母親においては習い事の負担感が高いと子どもの成長に対して感じる幸福感も高いという結果が得られたが，これは習い事によって感じられた負担が，子どもの成長によって報われたと受けとめられた結果と考えることができる。しかしこれらの結果に関しては，本研究では子どもの成長と母親にかかる負担の内容による詳細な検討は行っておらず，習い事を通じてのどのような成長，負担が母親の育児不安，育児幸福感に関連するかについて評価することはできない。習い事を通じての子どもの成長と負担の内容についても併せて検討することで，母親は子どもの習い事をどのように選択し，サポートしていけばよいのかという情報を提供し，育児支援に活かすことができると期待される。

また先述のように，育児不安に関しては，育ての専門家によるサポートや，育児仲間の存在，自分の不満を話すことのできる環境・ネットワークの存在が育児不安を緩和するとされることから，習い事によって他児の保護者や指導者と関わりを持つことが育児不安を緩和すると考えられた。今回の結果は，専業母親ではこの予測に一致するが，有職母親については一致しなかったといえる。このことは，子どもの習い事によって構築される社会的ネットワークが果たす役割が，専業母親と有職母親とでは異なることを示唆している。今後，子どもの習い事によって新たに形成される人間関係が専業母親と有職母親にとってどのような意味合いを持つのかを検討することは，母親の育児不安について適切に理解していく上で有効であると考えられる。

なお，育児幸福感については習い事による子どもの成長感，母親の負担感との間で弱い相関がみられるにとどまった。この理由の一つとして，育児幸福感の各下位尺度のニュートラルポイントが 3.00 であるのに対して，本調査協力者全体の育児幸福感は 4.00 超と高かったことが考えられる。清水他（2007）においても，各下位尺度の値は 4.00 超であることから，本調査協力者が特に育児幸福感の高い集団であったとはいえない。しかし，この数値の偏りによって違いが現れにくかったと考えられる。また育児幸福感については，母親の就労状態や子どもの習い事状況による差もほとんど見られなかったが，これについても育児幸福感の高さが影響したと考えられる。このことから，子どもの習い事と母親の育児幸福感との関連については，尺度選定を含めての見直しが必要である。

本研究の課題として，本研究におけるデータは，習い事をしているかといった習い事の状況と，母親の就労状態に偏りがあった。特に習い事をしていない群のサンプル数が少数であったため，習い事をしていない子どもの母親については一部を除き分析を実施することができなかった。今後，十分なサンプルを収集した上で子どもの習い事と母親の育児感との関連について分析を行い，子どもの母親の育児感に習い事が与える影響についてさらに検討する必要がある。

引用文献

荒牧美佐子・無藤　隆 (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い－未就学児を持つ母親を対象に－　発達心理学研究 , **19**, 87-97.

ベネッセ教育総合研究所 (2009). 第 3 回子育て生活基本調査（幼児　版　） https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2008_youji/hon/index.html (2014.1.30)

ベネッセ教育総合研究所 (2016). 第 5 回幼児の生活アンケートレポート https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/jisedai/reseach/yoji-anq_5/YOJI_chp1_P13_35.pdf (2019.3.25)

原田正文 (1993). 子育てに自信のない親－早期教育の隆盛は親の不安のあらわれ－　児童心理 , **47**, 1111-1116.

伊藤葉子・鳥原菜穂子 (2000). 習いごとに対する親の意識 千葉大学教育学部研究紀要 , **48**, 111-122.

片桐真弓 (2013). 家庭教育の現在と母親たち　尚絅大学研究紀要 A. 人文・社会科学編 , **45**, 1-20.

加藤恵子・小林　真 (2001). 母親の育児不安とソーシャルサポート 富山大学教育実践総合センター紀要 , **2**, 45-50.

牧野カツコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞　家庭教育研究所紀要 , **3**, 34-56.

中山南海子・栗原武志・森　博文 (2005). 習いごとへ子どもを通わせる親の意識に関する研究　京都女子大学発達教育学部紀要 , **1**, 93-104.

澤田あずさ・明野聖子・吉森友香・工藤偵子 (2009). 1 歳 6 か月児の父親の労働時間・育児参加時間からみた母親の育児幸福感 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 , **5**, 13-21.

清水嘉子・伊勢カンナ (2006). 母親の育児幸福感と育児事情の実態 母子衛生 , **47**, 344-351.

清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子・落合富美江 (2007). 母親の育児幸福感—尺度の開発と妥当性の検討—　日本看護科学会誌 , **27**, 15-24.

手島聖子・原口雅治 (2003). 乳幼児健康診査を通した育児支援－育児ストレス尺度の開発－　福岡県立大学看護学部紀要 , **1**, 15-27.

渡辺弥生・石井睦子 (2005). 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について　法政大学文学部紀要 , **51**, 35-46.

付記

この論文は，第 3 著者が神戸大学に提出した卒業論文（平成 25 年度，幼児期における子どもの習い事が親の心理に及ぼす影響について）を第 1，第 2 著者が再分析し，まとめたものである。調査にご回答いただいた保護者の皆様，ならびに調査実施にご協力いただいた幼稚園の先生方に，心から感謝申し上げます。